

一 次の①～⑤の [] に当てはまる言葉を語群から選び、漢字で答えなさい。

- ① 水分を [] 給する。
- ② 油断は [] 物だ。
- ③ 乳 [] が抜けて生えかわる。
- ④ [] 密に調査する。
- ⑤ 彼とは水 [] の交わりだ。

《語群》

シ ゲン キン ホ ギョ

二 次の①～⑤の [] に当てはまる漢字一字を自分で考えて答えなさい。

- ① まゆから生 [] をつむぐ。
- ② 台風で急に [] 足が強くなる。
- ③ [] けは人のためならず。
- ④ [] をつかむようなお話だ。
- ⑤ 試験後、肩の [] がおりた気になる。

三 次の文章を読んで後の問に答えなさい。ただし設問の都合上、文言を改めた部分があります。

男性にとっても、女性にとっても異性とは気になる存在である。

女性はアクセサリーや服装にお金を掛けて美しくオシャレをして男性の気を惹こうとするし、男性も女性にいいところを見せようと格好をつけてデートで奮発したり、贈り物をしたりする。好きな人ができれば眠れぬ夜を過ごさなければならないし、失恋すれば、何日も落ち込まなければならない。

それもこれも、男と女という存在があるからなのだ。

男と女は謎に満ちている。

それは、「男心や女心がわからない」とか「恋は異なもの」などという意味ではない。

そもそも、どうして、この世の中に男と女はいるのだろうか。

動物にも鳥にも虫にもオスとメスとがある。植物にだって雄しべと雌しべがある。

しかし考えてみれば、オスとメスとがあるのは、けっして当たり前のことではない。

どうして、生物にはオスとメスという性があるのだろうか。

38億年前に思いを馳せてみよう。

それは地球に生命が誕生した頃である。その頃、誕生した単細胞生物には、雌雄の区別はなかった。単純に細胞分裂をして増えていたのである。オスとメスとがいるのは、子孫を残すためだと思うかも知れないが、別にオスとメスとがなくても、子孫を残すことはできるのだ。

細胞分裂をして増殖していくことは、元の個体と同じ性質を持つコピーを作り続けていくことになる。つまり、すべての個体が

同じ性質であるということは、どんなに増えても弱点は同じということになってしまう。そのため、もし環境が変化してしまうと、個体が全滅してしまうということが起こりうるのだ。

一方、色々な性質の個体があれば、環境が変化しても、どれかは生き残ることができる。

そのため、生物が同じ性質の個体が増えていくよりも、性質の異なる個体を増やしていったほうが、生物種として生き残っていくには有利なのである。それでは、どのようにすれば自分とは異なる性質を持つ子孫を増やすことができるのだろうか。

自分の遺伝子だけで子孫を作ろうとすれば、自分と同じか、自分と似たような性質を持つ子孫しか作ることができない。自分と異なる子孫を作ろうと思えば、他者から遺伝子をもらうしかない。つまり、遺伝子を交換すれば良いのである。

しかし、せっかく手間を掛けて交換するのであれば、自分と同じような相手と遺伝子を交換するのは残念である。

たとえば、せっかく異業種交流会に参加しても、自分と同じ業界の人としか名刺交換しなかったとすれば、意義は小さい。それならば、業界ごとにグループを作り、見ただけでグループが違おうようにしたらどうだろう。そうすれば、効率よく異業種の人を選んで名刺交換ができることだろう。

② オスとメスという二つのグループも、同じしくみである。異業種交流が新しい世界を生むように、オスとメスとが遺伝子を交換することによってバラエティに富んだ子孫が産まれるのだ。

それならば、オスとメスだけでなく、いくつもグループを作った方が良いような気もするが、グループが多すぎると組み合わせが多すぎて、結局、うまく子孫を残せないグループができてしまう。

結果的には、二つのグループで交流する方がもっとも効率良く、確実に子孫を残すことができるのである。つまり、オスとメスである。しかし、不思議である。

もし、すべての個体がメスであれば、ペアになったどちらもが子孫を残すことができる。つまり、子孫の数は倍になるのだ。それなのに、

どうして子どもを産むことができないオスという存在があるのだろうか。

じつは「どうしてオスが必要なのか？」というあまりに素朴な問いに対する明確な答えは、残念ながら出ていない。それでもしかし、世の中には「オス」が存在している。

きっと、オスは確かな存在価値を持って存在しているはずである。男性の皆さんは、せめて、そう思うしかないだろう。

生物に二つのグループが作られたとき、最初からオスの個体とメスの個体とが作られたわけではない。もともと生物に作られたのは、生殖細胞としてのオスの配偶子とメスの配偶子である。

配偶子は大きい方が栄養分を豊富に持つことができるから、生存に有利である。そのため、大きい配偶子は人気がある。大きい配偶子とペアになることができる可能性が高まるからだ。

ただし、大きければ大きいほど良いというわけではない。配偶子が大きくなると、移動しにくくなってしまふのだ。遺伝子を交換して、子孫を残すためには、配偶子同士が出会わなければならないから、これでは都合が悪い。

もともと、人気のある大きな配偶子は、他の配偶子の方から寄ってくるから、そんなに動く必要はない。それでは、大きさに劣る配偶子はどうかすれば良いだろうか。

ただ、待っているだけでは、人気のない配偶子はペアになれないから、自らが動いて、他の配偶子のところに行かなければならなくなる。移動するためには、大きな体よりも小さな体の方が有利だ。そこで、一方の配偶子は逆に体を小さくして移動能力を高めた。

③ こうして大きな配偶子は、より大きくなっていくし、小さな配偶子は、より小さくなっていく。こうして体の大きいメスの配偶子と体の小さいオスの配偶子が生まれたのだ。ちょうど卵子と精子のようなものだ。

オスの配偶子が、体を小さくすると、生存率は低くなってしまふ。しかし、他の配偶子に負けないように移動しなければ、ペアになることはできないから、オスの配偶子は移動能力を優先して、メスの配偶子の元に遺伝子を持って駆け付けただけの存在になった。

〈注〉1 配偶子——生物の生殖細胞のうち、接合して新しい個体をつくるもの。ヒトの場合は卵子と精子がそれに当たる。

こうして、遺伝子を運ぶだけのオスの配偶子と、遺伝子を受け取って子孫を残すメスの配偶子という役割分担ができたのである。

やがて、オスの配偶子のみを作る「オス」という個体と、メスの配偶子のみを作る「メス」という個体が発達した。こうして、子孫を産むことのない「オス」という特別な存在が誕生したのである。

どんなに強がって虚勢を張ってみても、生物学的にはオスはメスのために作られた。これは紛れもない真実である。本稿はずっと「男と女」と書いてきたが、本当は「女と男」なのだ。

生物にとって子孫を残すことがもつとも大切であるとすれば、やはりメスの方が大切である。メスは子孫を残すために莫大なエネルギーを必要とする。

これに対して、オスが繁殖に必要とするエネルギーは、メスに比べるとずっと少ない。そのため、オスは余ったエネルギーを使って、メスをサポートするようになったのである。

たとえば、オスは外敵と戦ってメスを守り、メスが安心して子孫を残せるようにする。あるいは、オス同士が戦い合うこともある。しかし、これも、強いオスを選ぶメスの手間を省いているのだ。メスは子孫を残すために、コストのかかる作業をすべてオスに任せているのである。

単独で子孫を残すことのできないオスは切ない。

クジャクのように必死にメスにアピールするものもいれば、シカのオスのようにメスを巡って争い合うものもある。ハーレムを作るゾウアザラシは、うらやましく思うかも知れないが、ハーレムを守るために神経をすり減らし、寿命が短くなってしまうというから切ない。

これもそれも、すべてはメスのためなのだ。

④ 男と女というのは、時間もコストも掛かる面倒くさいシステムである。しかし、男と女は生物の進化が創り出した発明だ。そして、男

と女は、多様性ある子孫を残すためのものだった。それは、言いかえれば個性ある子孫と言っている。

そうして苦勞して手に入れた個性なのに、人間は、型にはめようとしたり、成績で比べようとしたり、と個性を失くそうと懸命なのが面白い。

世の中に男と女がいる。そして、さまざまな個性がある。本当はそれだけで、十分に楽しく豊かなことなのである。

(稲垣栄洋「オスはメスのために作られた!？」この世界に男と女がいる簡単な理由」より。)

問一——線部①へどのようにすれば自分とは異なる性質を持つ子孫を増やすことができるのだろうかとありますが、その答えを10字以上15字以内で説明しなさい。

問二——線部②へオスとメスという二つのグループとありますが、生物にはなぜ二つしかグループがないのですか。40字以上50字以内で説明しなさい。

問三——線部③へ小さな配偶子は、より小さくなっていくとありますが、配偶子にとって小さいことはどのような点で有利なのですか。40字以上50字以内で説明しなさい。

四 次の文章を読んで後の問に答えなさい。

元プロ野球選手の父に連れられ、ある選手のプレーを見に球場へ来た「僕」は、そのプレーに魅了され、やがて彼は「僕」にとっての「神様」になりました。そのあこがれから「僕」は中学・高校と野球に打ち込んできましたが、大学に在学している現在、大けがをして野球をあきらめかけています。無気力なまま、友人の西崎の紹介で牛井屋のアルバイトをはじめます。次の文章は、アルバイトをしながら当時を回想している場面です。

僕が小学校五年生の時だった。

併殺^{へいさう}を処理する時、ベースカバーに入った神様は、二塁^{るい}に走りこんで来た一塁走者と激しく衝突^{しょうとつ}した。地面に転がり、そのまま立ち上がれなかった。肩^{かた}を負傷したのである。一塁走者は大柄な外国人選手だった。神様は小柄^{こがら}で、年齢^{ねんれい}も若くはなかった。

ほんの二、三年前なら、あんなにまともにぶつかることはなかった。もつとうまくわせたことだろう。

後になって、神様がそう話していたのを、僕は野球雑誌の記事で知った。

神様はそのシーズンを棒に振った。そればかりではない。次のシーズンの途中^{とちゆう}で、彼は引退を表明した。

神様の守備は、もう二度と見られなくなったのだった。

引退してしばらくは守備コーチをしていたようだが、いつしかその名を聞くことはなくなった。そのひとは、僕にとつての神様ではあつたが、一般^{いっぱん}に知られた華やかなスター選手ではなかった。所属するチームは常に経営難に喘^{あえ}いでいたし、彼の本領は守備である。お立ち台に立ち、スポーツ紙の見出しを飾^{かざ}ることは滅多^{めった}になかった。

奥^{おく}さんと離婚^{りこん}して、生活が荒^あれている。泥酔^{でいすい}し、盛り場で暴れ、警察沙汰^{ざた}になったこともある。

〈注〉 1 泥酔——ひどく酔うこと。

同級生が、父親の読む夕刊紙に書かれていた、と言つて、そんな話を教えてくれた。僕はそれを信じたくなかつた。^①

あのひとはいつまでもユニフォームを着て、グラウンドを蹴^けつて走っている。腕^{うで}を伸ばして、宙を飛ぶ。グラブの中に球が吸^すい込まれる。その姿だけを、僕はいつまでも追いかけていたかつた。

中略

「あら」

西崎^{かのじよ}の彼女が小さく叫^{さけ}んだ。「忘れ物をしているみたいよ、あのおじさん」^②

テーブルの上に、黒い携帯電話が投げ出すように置いてある。僕は慌^{あわ}てて自動扉^{とびら}の外へと飛び出した。

店のすぐ前にあるごみ収集所で、大きなカラスが袋^{ふくろ}の中の生ごみを撒^まき散らしている。朝日にさらけ出された汚^{きた}らしい路^{みち}上を、男と赤毛の女とが、駅の方に向かってふらふらと歩いていくのが見えた。

「お客さん、忘れ物ですよ」

声をかける。反応したのは赤毛の女の方だった。

「携帯電話をお忘れです」

赤毛の女が身を翻^{ひるがえ}し、小走りでこちらに戻^{もど}つて来る。男はその場に立ち止まっている。西崎の彼女も店から出て来て、携帯電話を赤毛の女に手渡^{てわた}した。

「ありがとうね」

赤毛の女はにつこり笑った。「おっちゃん、いつもなの。いつもいつも、何かしら置き忘れるんだよね」

そう言うってから、赤毛の女は僕らに背を向けた。

「おっちゃん、忘れ物」

男の方に歩み寄りつつ、赤毛の女が声を張り上げる。

「あんたの唯一の財産、携帯電話だよ」

僕の横で、西崎の彼女がぷつと吹き出した。男が振り向く。正面から朝日を浴びて、まぶしげに眼を細める。

「ほら」

赤毛の女が電話機を高く抛り投げた。男が腰を落とし、左腕を伸ばす。

僕ははっとした。

腰を軽く落とし気味にボールを受ける、歓声の中に立つ男の姿。

まさか。僕は眩いた。まさか、そんなことってあるのだろうか。

ネットの遥か向こうにある、遠い背中。TV画面や雑誌で見た笑顔。確かに見覚えのある、その顔。そのひとは、僕の記憶にある姿より小柄だった。いくらか肥って、髪が薄くなってもいた。

ほんの瞬間の動作だった。

「瞬間のち、黒い電話機は男の掌の中に収まっていた。

「ねえ、もう朝だよ」

赤毛の女の声が、僕の耳に届いた。

「遅くなって、本当にごめんね。大丈夫なの、練習？」

男の返事は聞こえなかった。

「喜んでたもんね、みんな。おっちゃんのコーチを受けて、チームの力が飛躍的に上がった、なんて。たかが草野球なのにさ」

呼び止めかけて、口を閉ざす。言うべき言葉を、僕はひとつも持たない。蠅が飛び交い、汚物が点々と散乱する朝の街に、そのひとの背中が遠ざかっていくのを、僕は黙って見送っている。

たまたま僕の働いていた店に、偶然あのひとが立ち寄った。それは、世界の誰にとっても意味はない、僕にだけ価値のある小さな奇跡だった。

「岩田さん、どうしたの」

西崎の彼女の声で我に返った。

「あのおじさん、よく来るひとなの？」

僕は首を横に振った。

「また来るかしら」

西崎の彼女はくすりと笑った。

「助けてもらって、こんなこと言っちゃ悪いけど、あのおじさんもうちの彼氏と変わらないみたい。神様なんかじゃなかったみたいね。彼女に牛井屋の支払いまでぜんぶ頼りきりだなんて」

「違うよ。」

あのひとは神様なんだ。世界中でただひとり、この僕にとっては。

勤務はあと二時間と少し。今日はこのまま家には帰らず、野球部の練習グラウンドへ行こうと思った。日曜日だが、大会を目前にしている。練習に休みはない。チームメイトのみんなに会いたい。そして、監督に会ってきちんと話をしたい。

半年以上の空白期間。危険を抱えた腰。以前の状態には戻れないかもしれないが、できる限りのことはしたい。その時間と機会を与えて欲しいと、監督に頭を下げておきたい。

今年の選手権大会を、ベンチにすら入ることなく、僕は見守ることになる。だが、来年がある。僕にはまだ最終学年が残されている。

牛井屋の店長にも、アルバイトを辞めることを伝え、謝らねばならない。西崎のことをとやかくは言えない。僕は実に身勝手なアルバイト学生である。

そして、それからどうなる？ 来年の選手権大会に間に合うにせよ、それが不可能であるにせよ、僕が進み続ける限り、その行く末は決まっている。待ち受けているのは、親父が落ち、あのひとでさえ逃れることができなかった深い奈落だ。それはわかりきっている。だが、それでも僕はそちらへ向かって歩いていきたい。

家に帰ったら、母親にも自分の意志を伝えなければならない。母親は怒るだろう。いずれは負けるとわかっていながらその先へ向かうなんて、信じられないほど愚かな話だと。けれど仕方がない。母親には、ろくでなしの元の夫と、父親に劣らず大馬鹿者の息子を持って、運が悪かったと嘆いてもらうしかない。

④あと少し、もう少しだけでもいい。僕は進んでいきたいのだ。僕の神様の光る背中、いや、輝きを失った、敗れ去るその背に向かつて。もう少し待って、もう少しここにいさせてくれよ、親父。

いつか、僕はそう語りかけていることに気付く。子供のころ、そう言って駄々をこねたように、もう少し、もう少しだけと、僕は祈るよ

〈注 2 奈落——これ以上どうにもならないどん底。〉

うに思い続けている。

(加藤元「四百三十円の神様」より。)

問一——線部①〈僕はそれを信じたくなかった〉とありますが、〈それ〉は誰の、どういう姿ですか。15字以上25字以内で説明しなさい。

問二——線部②〈あのおじさん〉とありますが、〈おじさん〉とは誰で、何をしている人ですか。25字以上30字以内で説明しなさい。

問三——線部③〈僕が進み続ける限り、その行く末は決まっている。待ち受けているのは、親父が落ち、あのひとでさえ逃れることができなかつた深い奈落だ〉とありますが、ここでいう、〈行く末〉とは〈僕〉がどうなる状態をさしていますか。具体的に25字以上35字以内で説明しなさい。

40